

ToHeart2 FanBook

Temptation

ADULT ONLY





Temptation
ToHeart2 FanBook



きゃっ

ドーン

バサバサバサ

あごめんなさい
ごめんなさい!
今片付けますから

小牧さん手伝うよ

河野くん…!

あー

やだっ…
だいじょうぶ
ですから…!

ひびく

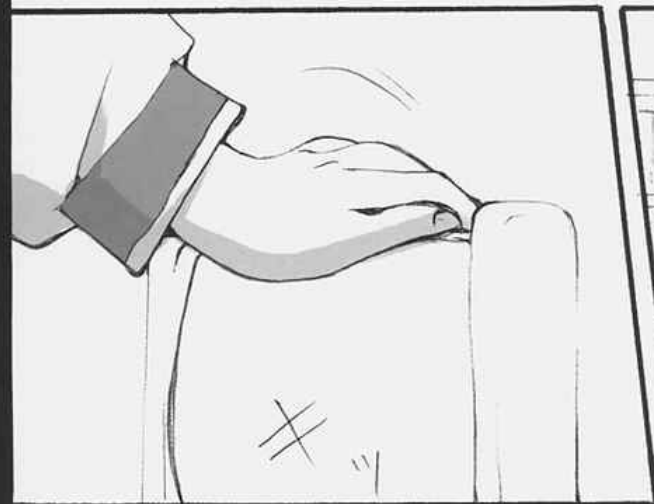
クワッ

やちがうんです
ごごめんなさい

あの
手伝ってくれて
ありがとう

それじゃあ

あま



なぐにが
「ひぐつ」だよ
カマトトぶりやがって
な 委員ちよー♪

ひぐ

あ

くちゅ

こんなことだろうと
思ったぜ

男にふれて
我慢できるはずないもん
なあ…

グンッ

こし…
向坂くん…!!



んんん

お前みたいなの
淫乱がよっ!



ち...ちがいます!
私そんな!

へえ
それじゃあ
委員ちよの身体に
聞いてみようかな



おやおや
このぐちよぐちよ
と音を立てる粘液は
いったい何かな?

ヤ
そ...それは
...あつ...はあああつ

あはは、

あはは、あはは、あはは、

んんん
あはは



ほら
残さず飲みほせよな

あの…向坂くん
あ あたしもう…
我慢できな…っ

い…っ
いれてください…い

ん…
ん…

ん…
ん…

ほう
そういう時は
なんて言うんだった
かな？

……あ……う

ま…愛佳の………に
……して……く……ください……

はあ？
聞こえないなあ

!?

ま…愛佳の……!!
ぐちよぐちよのおマンコに
向坂くんのおちんちんを
い……いれてください……!!



気持ちいい...
あッ...気持ちいい

きた...
はいつてきた...

ひゃッ

はあッ

あッ

あッ

あッ

あッ

あッ

あッ

あッ

あッ

あッ

あッ



あふッ

ひあッ

んあはあッ



ああああッ
もう...らめえ

はあ



あッあッあッあッあッ
あッあはあ...ッ!

あッ♡

やっ...奥に
奥に突き刺さって
あッ...スゴイ...
あッあああんっ

ズンズン

ズンズン

ズンズン

あッ



あまあま

ひやつ
ああああんあああ

はあー!

はあー!

ああーっ

は

は

きやつ

ドンッ



どうしよう...




愛佳
濡れちゃう…





COURMET-NYANKICHI

NEKOYASHIKI NEKOMARU
PRESENTS



【Change her style】

文・童子 挿絵・猫屋敷ねこ丸

【Change her style】

「変態！ どこで買ってきたのよ！」

放課後。掃除も終わって、誰もいなくなった音楽室。

窓の外から聞こえてくる、野球部の掛け声。

今、俺の前にいる、セーラー服姿のショートカット少女。

「たかあき！ いくら負けたからって、これはヒドすぎ！」

そして、少女……の目の前に置かれた、メイド服。

「由真あ？ 話が違うじゃないか。負けたら何でもするって言ったよな？」

唇をぎゅつと結び、よほど悔しいのか握った拳がプルプルと震えている。

「ふっぎゅううう」

「ほれ、やらないのか？ やるのか？ 大人しく負けを認めるのか？」

先週、俺と由真の間で行なわれた『チキチキ！1セット限定

マッチのテニス・リベンジ対決』。5-5まで持ち込む白熱した

試合になりつつも、最後は疲れが出た由真の空振りで、あえなく

ゲームセット。

勝利者は相手に何でも命令出来る、という王様ゲーム的ルールを採用していた結果――

「由真のメイド服姿、見たいなあ。行く末、奉仕に生きる道。

今から練習しとくのもアリなんじゃないか」

ネットで調べまくって、わざわざ手に入れたメイド服。我ながら準備の良さには感心する。普段の勉強でもそれだけのマメさが出ればねえ、とはよく言われること。

「嫌味？ 皮肉？ それとも、蔑み？」

「いや、可愛い『彼女』の姿が見たいだけ」

「……………」

敢えて『彼女』の部分を大いに強調。予想外だったのだろう。

下唇をぐつと噛んだ由真の顔は一瞬にして、以前ゲームセンターで手に入れたタコのヌイグルミのように真っ赤になる。

由真が俺の『彼女』になってから、早いもので一ヶ月。

さんざん、学校帰りにMTBの後ろに乗って、ヤックに行って、映画見て。随分と二人の時間を築き上げてきたものだが、それでも恋愛関係には疎いタチ。『彼女』なんてセリフは言われ慣れていないはず。

「た……たかあきの……ため、ならしやうがないわ。

……………いいわ……………見せてあげる」

――心の奥で大きくガッツポーズ。

一方の由真は両手を腰に当て、むんずとふんぞり返って大声で。

「よおおく見とけええええ！」

おー、パチ。パチ。パチ……………

余りに大見得を切るものだから思わず拍手をしてしまうが、上履きでそのまま蹴りを入れてきそうな構えをしたので、軽くバックステップをしてやり過ごす。

さて、大見得を切った方がいいが、それでも恥ずかしさは残って

いるようで。

足元からメイド服を拾い上げ、それを両手で思い切りバーンと広げたままで止まってしまおう。

「おーい、由真。大丈夫か？」

「……………」

ちよつと心配になったので声をかけてみるが、反応がない。

メイド服を通してのコミュニケーション、失敗。

いやいや。懲りずに、もう一度。

「おーい」

「聞こえてるわよ！ とにかく、あっち向いててよ！」

メイド服をくしゃつと潰して胸に抱いた由真は、今度は耳までを真っ赤にして目を大きく開いて。犬を追い払うかのように

「しっしっ」と俺に回れ右を指示する。

「しよーがないなあ」

幾分オーバーリアクション気味に俺は手を広げると、そのままゆっくり時間をかけて由真に背を向ける。

「いい？ 絶対にこっち向いたら……………」

背中越しに遠ざかる足音が聞こえ、ほどなくして衣擦れの音が聞こえ始める。

しかし――

「んー……………んー……………」

しばらくして衣擦れの音が止まった頃、代わりに聞こえ始めた呻き声。

「本当に……………大丈夫か？」

さすがにかなり心配になったので、本気で心配してみる。

「フアスナーが……………上がらない……………ふぎや」

何だか大変なことになっているようだ。

「上げてやろうか……………」

「大丈夫よ！ 私だけで……………あつ……………ああつ、いた、いた……………」

「……………いたた」

「……………破くなよ」

「……………くううう……………」

「なあ。俺が上げてやっても、いいぞ？」

「……………ふぎゅう」

「由真？」

「今、首を縦に振ったじゃない！」

――見えないって。

お許しを得たところで、由真の方に向き直るとピアノの陰で倒れている由真の姿。思い切り背中に手を伸ばしてメイド服と格闘している。

「どうしてこんな着にくいデザインなのよ！」

キレながらも、それでも意地になって着ようとしている所が由真らしい。

「ほら。ちよつと貸してみ」

俺は由真の後ろに回りこんでちよつと屈むと、片手で軽く服を押さえ、もう片方の手でフアスナーを上げる。思っていたよりも簡単。そのまま腰に付けられた大きなリボン縛ってあげて

――完成。



「おおっ」

思いがけず、唸ってしまう。

「な……何よ、恥ずかしいじゃない……」

メイド服に全身を包まれた由真。

再び顔を赤く染めた由真は、そっぽを向いてしまう。

「でも、もしかしてこの服って……」

「あ、気づいたか？」

まだ付き合う前、由真がゲーセンで買った2つの人形。その内の

由真に似ている人形が着ていた服とほぼ同じデザインのメイド服を
探してきた俺。

「……やっぱり、変態」

「失礼な」

でも、言葉とは裏腹に、ちよつと嬉しかったのか。由真は

エプロンのフリルを指でいじったり、丸く広がったスカートの裾を

摘んだりして結構楽しんでる。

「あれ。たかあきい。なにそんな顔赤くしてるの？」

「ちよつ……由真、それはだなあ……」

「あ！もしかして、凶星でしょ」

「……」

今度はこちらが無言になる番だった。

事実、その姿は扇情的で、俺の心を掴んで離さない。

俺の表情を見てやろうということなのか、唇の端を上げ不敵な笑み

をこぼす由真が見上げてくる視線にさえドキリとして。こっちの

趣味もあったのか、俺は。

枯れ木に火がつくように、突如として俺の心に沸き起る強い
感情。

由真を包むフリル、夕日を浴びて光る髪、ピアノの下に隠す
ようにして置かれた着替え。跪き、目の前数センチのところまで
近づいてきた由真の顔。

「ご主人様、お呼びでしょうか？」

俺の顔にかかる息が、我慢のリミッターを外した。

——もう、想いを止めることは出来ない。

「なあ、由真……啞えて……くれないか？」

「……」

俺の口を飛び出した、言葉。

由真は俺から目を外すと、窓の外をじつと無言で見つめている。

——マズい。

「ゆ、由真……」

「いいよ。たかあきがして欲しいのなら、してあげる」

「へ？」

今度驚くのは俺の番だ。

予想外の言葉を漏らした俺と、予想外の答えを返した由真。

視線を窓から俺に戻した由真は、俺の顔をまっすぐに見据えて

くる。

もはや首筋から手の先まで真っ赤、体を支えるようにして前に
ついた腕も小刻みに震えているが、それでも目には強い意志を
たたえて大きく見開いて。

四つんばいになった由真は赤ちゃんのハイハイのように近づいて

くると、俺のベルトをむんずと精一杯の力で掴んで立ち膝になる。

動きは大雑把そのもの。当然のごとく慣れない手つきで、なのに思いつきりの力を込めてズボンのファスナーを一気に下げると、そこから手を入れ、俺の『モノ』を取り出す。

「いだだだふあ」

ドキドキしたことで、ちよつと大きくなっていた『モノ』がファスナーに絡まって痛い。

「…………ちよ、ちよつとくらい我慢しなさいよ！」

それは無理。

しかし、そんな俺の気持ちなど全く伝わっていない由真は、

『モノ』を握る力を強め、向き合う。

「ひ…………っ」

これほど間近に見たことなどなかったのだろう。赤く火照っていた顔も青ざめ、力のこもった手のひらが汗ばんでいるのが分かる。

「い、いくわよ…………」

それだけ言うと、俺の答えなど待たずに思いつきり口を開いた

由真。

「うぐっ」

だが、あまりにも勢いをつけてやったものだから、先端が喉の奥に当たり、由真の顔が苦痛に歪む。

「お、おいつ…………やめろってば…………う…………いあつ…………」

由真は唾えた『モノ』を動かすことに精一杯で、俺の言葉など、全く聞こえていない。

歯が当たるし、動きもただ頭を前後するだけで、お世辞にも上手

いとは言えないフェラチオ。しかし、涙を目尻に湛えてもなお続け、その健気な行為に『モノ』は正直に反応して大きくなっていく。そのことに由真自身も気づいたのか、頬張りながら俺に訴えてくる。

「ふわあんなのよほお…………うわっ」

天を仰がんとするほどに上向き、張り詰めた『モノ』は結局、由真の口に収まりきれなくなって飛び出してくる。

「わ…………おつきい…………」

自分でも驚くほどに大きくなった『モノ』。すっかり顔に朱を戻した由真は目を見開いて見つめたままで固まっている。

——抱きしめたい

「…………て、ちよつと…………た、貴明！ わ、わわっ！」

俺は呆然としていた由真の肩を押してそのまま床に押し倒すと、手足をバタバタとさせる由真の抵抗を受けつつも顔を両手で押さえ、由真に口付ける。

「あ…………」

そのまま俺は額に、頬に、耳に、首筋に、髪に、キスをする。

力を緩めた由真をぎゅっと強く抱きしめると、由真は体を大人しく俺に預けてくる。

今度は濃厚なキス。唇に舌をするりと差し入れると、由真の唇の中で隠れていた舌に、歯の裏に、上に、下にと這わせていく。

先ほど目尻に溜まっていた涙が一滴、頬を伝ってながれる。だが、それ以後に涙が続く気配はない。

ゆっくりと顔を由真の耳元に持っていくと

「いいか？」

とだけ、聞く。

瞳を閉じ、コクリと小さく頷いて、手足をダラりとさせる由真。

手始めに由真の腰を持ち上げて後ろのリボンを解くとエプロンを外し、ワンピースの背中側に付けられたファスナーを下げる。

「さつき着たばつかなのに」

由真は目を閉じたまま、小さな声で不平を零すが、丁度聞こえてきた野球部のバットがカキーンと立てる音で聞こえなかったことにして、ゆっくりワンピースから肩を出し、胸元まで下ろしてブラジャーを露にしていく。

「……恥ずかしい」

いちいち反応する由真。俺の前では勝気な性格だが、実は胸はなかなかある。

ブラジャーのまま軽くもみしだくと、胸が形を変えて動くのが分かる。

「ふわっ……はぁ……ふう」

目を軽く閉じ、吐息も変化してきたところで、ブラジャーのホックを外して今度は胸をそのまま直に触れていく。その一方で、胸にばかり集中していた由真に奇襲をするように

「イヤっ……」

スカートを片手でたくしあげ、その先の由真の『大切な部分』をショーツの上から撫でさせる。

「ふっあっふわっ……」

クリトリスを中心に、円を描くように、割れ目にそって上下する

ように。指先に全神経を集中する。イヤという言葉も本心ではないらしい。

「はっ……はっ……うぁ」

頭を大きく仰け反らせたところで両手をショーツの腰に宛がうと、一気にショーツを抜き取る。

「きゃっー」

思わぬことにビックリしたのか、瞳を開けるが、すぐに閉じて再び顔を背けてしまう。

「もうちょつと……優しくして……」

反省。

再び、ゆっくり、優しく、指先でクリトリスに触れると熱く湿った蜜を感じる。少しずつ力を入れて割れ目の中心に指を埋めていくと、肌よりもかなり熱い粘膜に包まれていく。

「……指じゃ……イヤだよ」

少し指で由真を感じようとも思ったが、由真をまた傷つけても仕方ないので御願いに大人しく答えることにする。

スカートをめくり、太ももの辺りに手をあてると、ゆっくりと腰を前に押し進めていく。

「……」

由真はぎゅっと閉じる目を更に強く閉じ、音楽室のタイル張りの床を搔くようにツメを立てる。

「痛い……か？」

「……だい……じょう……ぶ」

まだまだ硬い由真の『中』に俺は侵入を阻まれるが、腰を



ぐっと入れると行き止まりに達する。

——ハアハアハア

互いに肩で荒い息をする俺たち。余裕が出て目を開いた由真と目が合うと、なぜか「ふふっ」とどちらともなく笑みが零れた。

「前より、かなり……大丈夫かも。動いていいよ……」

精一杯の勇氣。

由真の言葉に甘えまくりの俺は、由真の腰に手を当てて固定させると、自分の腰をそのままグラインドさせる。

「あっ……やあっあっ……あっあっあっ」

腰と腰がぶつかるのに合わせて、甘い声を出す由真。次第に腰を早くしていくと

「あっあっあっあっあっあっ」

嬌声も徐々に早くなっていく。

腰を引くたびに、入れるたびに、俺の『モノ』には熱いザラザラがまとわりついて掴んで。俺の理性を破壊する。

「やっやっあああっあああっ」

「由真、由真、由真あああっ！」

「たかあき、たかあき、たかあきいいいっ！」

絶叫と共に、同時に果てる俺と由真。

失いかける意識の中、懸命に俺は腰を引いて精液を出し、代わりに由真に口付けた。

俺の腕の中で眠る由真。

思い切り強がって、無理をして。俺の前では、いつも一生懸命な由真。

普段は物静かで、何事にも反応を示さない由真の見せる、本当の姿。幸せそうな寝顔を見ているとまたキスをしたくなって、顔を近づけるが

「たかあきい……」

突然の呼びかけ。起きたのかと思っただけでドキッとしますが、頬を軽く叩いても目を開ける気配はなく、寝言が続く。

「ふう……教えてあげる……冷凍大判焼きの美味しい食べ方……うふう」

どんな夢見てるんだよ。

でも、と思いついて由真を見つめる。その顔を見ていると、由真の見る夢の世界も、いいかもしれないと思えてくる。

——帰りに、大判焼き買っていこうかな。

少しだけ、由真が頷いた気がした。

Written by: 童子

Directed by: ゆんる



■体育倉庫で陵辱される愛佳ちゃんの図。
愛佳ちゃんは陵辱が似合うと思うのですよ。

こんにちは。または初めまして。猫屋敷ねこ丸と申します。
この度は当サークルの ToHeart2 本「Temptation」を手にしていただいて誠に有難うございます。

エロ可愛いという言葉は委員ちゃんのためにある！と思うねこ丸です（笑）
愛佳ちゃん、めちゃくちゃ可愛いですね！小動物のようなオドオドした素振りが可愛くってたまりません。
男の人が苦手なはずなのにどうしてこんなにエロい雰囲気をもっているのでしょうか。
そんなことを考えているうちに、いつもは他ジャンルで活動しているウチのサークルですが、愛佳本を出そうかなって思い始め、なんとかこうして形にすることができました♪
毎度の事ながら、かなりせっぱつまってますが…；ひー（^_^）

貴明との純愛系の漫画にするはずが、なんだかこんな内容に（汗）
愛佳と雄二はこんな奴じゃないよ～！って言われそうですが、愛佳ちゃんを見ていると可愛さ余って逸れた設定で描きたくなくなってしまいました。
裏のある性格に変えるのって好きなんです。
この本の雄二は裏雄二と勝手に呼んでます（おい）

次に ToHeart2 本を描くときは、このみか今回没にした愛佳ちゃんの純愛な漫画を描けたらいいなって思っています。
とりあえず XRATED 版をやってみてからになりますので、PS2 版で思い描いていた妄想が崩れ去ることもあり得るのですが…（^_^）

XRATED 版、発売日当日に買いましたよ♪でもこの原稿の入稿が終わるまで封印中。買ってからもう一ヶ月が経ってしまいました～、あー早くやりたいなあ…！
異性が苦手なはずの貴明と愛佳がどうなるのか…
そして新キャラのささらちゃんが楽しみです♪

最後になりましたが、今回素敵な小説をくださった童子くん&ゆうりさん、お忙しいなか本当に有り難うございました～～っ！
愛佳ちゃんを描くつもりが気が付いたら由真に…とのことですが、なんのなんの！イキイキとした由真がすごく可愛いです～！
挿絵、楽しく描かせていただきました♪気に入って頂けるといいな。

それでは今回はこの辺で。最後まで読んで頂いて有り難うございました。よろしかったら次の機会もお目にかかれると嬉しいです。

猫屋敷ねこ丸





• Temptation •

2006. 1. 29

発行 ■ くるめにゃん吉
発行者 ■ 猫屋敷ねこ丸

<http://www.nyankichi.net>

■ 無断転載・複製・18歳未満の方の閲覧は禁止です。



ToHeart2 FanBook

Temptation

ADULT ONLY

